

松本清張作品教材化試論

国語科教論 小尾 真

はじめに

小稿は、作家・松本清張の作品『或る「小倉日記」伝』を高校教科書作品として教材化しようという試みである。その理由は以下に述べるが、この作品は森鷗外が明治三十二年陸軍軍医監として三年間小倉に在任した時の日記がそっくり紛失していることに気づいた青年が、その日記を追い求める物語である。

読書の重要性

平成十六年、教育界では学力低下が叫ばれ、学習指導要領の改訂の必要性が議論されていた。その中、文化審議会は平成十六年二月三日、国語教育と読書活動の充実を図るよう文部科学大臣に答申した。それによると、指導の重点を「読む」と「書く」に置き、他教科も含めた全教員の国語力の向上を求めるなど、学校での国語教育の見直しを提言している。(各紙・平成十六年二月三日付夕刊)

これらの議論を持ち出すまでもなく、読書の重要性は古の昔から叫ばれてきた。また現代の若者の読書離れを危惧した人々によって、十五年前から「朝の十分間読書」運動が繰り広げられ、今では全国で一万校以上の学校が実践し、多くの成果をあげていることはよく知られているところである。

読書へのアプローチ

平成十四年は、松本清張が平成四年に亡くなってから十周年にあたった。

没後十年を記念して北九州市の松本清張記念館では、さまざまなイベントが企画されたが、その一つに中高生を対象とする作文コンクールがあった。

私の当時の勤務校でもこのコンクールを前向きに受け止め、全校に呼びかけたところ二十四編の応募があった。私はこれらの作文を読んで、強い衝撃を受けた。

続いて平成十五年にも第二回の同コンクールが開催されたが、今度は十一編の応募があった。これらもまた衝撃的な内容であった。

生徒の捉え方

平成十四年度の課題は『或る「小倉日記」伝』『点と線』『砂の器』の中から一点を選ぶというものであった。

『点と線』について、「おもしろかった。感動した。こんな作品とは久しぶりに出会った。うわべだけのおもしろさだけではない。人間の隠れた部分、言い換えると人間の陰と陽の部分をやましく引き出して書かれていると思う。最近テレビやマンガでよく見られる推理アニメ。推理することには変わりないのだが、そこには人間の奥深く持つ感情は描かれていない。それに引き換え、清張の作品は単なる推理だけではなく、人間の持つ様々な感情や人間関係が奥深く描かれている。

(中略) この作品『点と線』は、推理小説という枠を越えて、私たち人間の原点でもある陰と陽の部分の隠さず、それをテーマに書いてあると言ってもよいと思う。それ故に、書かれた当時から現代までずっと私たちに新鮮な感動を与え、読み続けられてきたのだろう。」(中二女子)

『砂の器』について「“砂の器”という題は、もろく、くずれやすい人間の本質を描いているのだろうと思う。和賀英良は、ハンセン病の父を持っていた。父親と離れてから自分の過去を捨てて、必死で生きたはずだ。名声や富を得るため、最大の努力もしただろう。しかし、捨ててしまいたい過去を、捨てきれない現実の中で事件は起きた。多分、僕には想像もできないほどの差別を自分の中で感じているからだろう。和賀は子供の頃幸せになりたいと心から願っていたはずだ。作者は“砂の器”を通して人間としての幸せとは何かを、伝えたかったのではないだろうか。心の器の中に、少しずつ幸せの笑顔を詰め合わせして行かなければならないという意味だったのではないか。(中略)初めて読んだ松本清張の本は本当におもしろく、興味深い内容だった。一気に読み切ることができたのは、バラバラであったいくつもの点を結んでゆくことの楽しさが味わえたからだ。」(中三男子)

さらに『或る「小倉日記」伝』について、「田上耕作も含め、登場する人物たちには、良くも悪くも嘘がないと私は思う。田上耕作がハンディのある人間で、それ故に受けた扱い、または山田てる子の悪気のない無邪気さなど、決して何かを美化したり、誇張したりした書き方はされていなかった。ふじの凛々しさも、白川さんの優しさ、江南鉄雄の気持ちの良さも、すべてがそれほど大袈裟ではなく、静かに優しいような気持ちになれた。(中略)この作品からは、空白になった鷗外の小倉での生活、そして森林太郎の生活に必死に歩み寄ろうとする耕作のひたむきさが感じられた。」(中三女子)

現代からみると、清張作品は時代的に古さを感じさせるが、時代背景を正しく読み取って、作者の意図をよくつかんでいたことが印象に残った。中学生がここまで読めるだろうか…と感じさせる作文もあり、思わず絶句してしまうこともしばしばであった。推理小説の感想文は難しい、という従来の観念を打ち破る結果となった。

平成十五年度の課題は『ゼロの焦点』『石の骨』『西郷札』の中から一点を選ぶというものであった。

『ゼロの焦点』について、「秘密。これは誰もが持つものであり、私にもおそらく、友、両親にもあるものであろう。しかし、それが事件を思わぬ方向に発展させる。人は他の者と信頼関係のもとで生活する。しかし、バリアフリーにならない部分がある。これがこの小説のひとつのテーマであると思う。それは人には見せたくない秘密であり、大なり小なり人を苦しめるものである。また、そうした事実スポットライトをあてると、人の意外性という問題に突き当たる。憲一はごく普通の勤め人であり、何も隠し事のない人間であるはずだった。それは、何もこの作品の禎子だけではない。私たち読者もそう思っていた。しかし、それはたいへんな誤解であると気づかされることになる。人は皆、生きる中で様々な体験をする。それをあぶりだすと、その人の想像もできない意外な部分を発見する。(中略)人の意外性、知られざる過去というファクターによって、ゼロの焦点は定まることになる。考えてみれば、憲一の意外性、秘密、これが事件の大きな伏線であった。だからこそ、かれの意外な過去を読者に示していたのである。そして、その焦点がひとつになったとき、写しだされたものは佐和子という犯罪者ではない。むしろ、彼女を犯罪へ駆り立てた時代、社会というものであった。作者は、「誰が動機を恨むことができよう」と言う。戦後の混乱期がどのようなものであったか、私にとって想像を超えるものであるが、おそらく人は生きるのに懸命であった時代であると思う。」(中二男子)

『石の骨』について、「この作品をドラマにしてみたい、と『石の骨』を読み終えた時に思った。四十五分程の短編で、こういう設定で、と目をつぶってあれこれ考えて行く内に気がついた。そうだ、私はすでに一本の格調高いドラマを見たのだ。「己」という少し乱暴な一人称で語られるこの作品に、最初から感情が入り、多くは語らないが、的確な表現の文章の力にグイグイ引っ張られて、主人公黒津と共に尊敬する教授の除幕式も、波津の海岸も、周囲のこそこそ声も、黒津の耳に吹く風の音も聞いたような気がする。」(中三女子)

これ以降、全国の中学生・高校生より良質の作文が集まり、従来大人の文学とされていた松本清張の作品が、若い人達に広く受け入れられていることを証明した。

純文学か大衆文学か

松本清張というと推理作家というイメージが強く、文学史の上でも一般に大衆文学作家に分類されている。しかし、周知のように昭和二十七年に芥川賞を受賞した『或る「小倉日記」伝』は、一本筋の通ったテーマをもった純文学作品である。当時芥川賞の選考委員の一人であった坂口安吾は、その選評で「文章甚だ老練、また正確で、静かでもある」とし「造型力逞しく底に奔放達意の自在さを秘めた文章力」と評価した。さらに「小倉日記の追跡だからこのように静寂で感傷的だけれども、この文章は実は殺人犯人をも追求しうる自在な力があり、その時はまたこれと趣きが変わりながらも同じように達意巧者に行き届いた仕上げのできる作者」(『文藝春秋』昭和二十八年三月)と述べ、将来の清張の活躍をこの時点で予言していた。

それより後、一年間の海外旅行からもどった伊藤整は「この一年間が日本の文学を大きく変化させた」と言い「最も大きな変化は、推理小説の際だった流行である」と続け、その張本人は松本清張と水上勉である、と述べている。「前者が、プロレタリア文学が昭和初年以來企てて果たさなかつた資本主義社会の暗黒の描出に成功し、後者が『雁の寺』の作風によって、私小説的なムード小説と推理小説の結び付きに成功すると、純文学は単独で存在し得るといふ根拠が薄弱に見える」(『群像』昭和三十六年二月)と述べ、二人の出現が純文学と大衆文学との区別に混乱を与えていることを告白している。

教科書の立場

教科書の編集にあたっては、その作品が純文学であるか、大衆文学であるかなどということは全く問題にならない。が、候補として上がってくる作品はそのほとんどが純文学作品である。これは、純文学はテーマを据えているので教室での展開が容易だからである。人生、愛、生きる、職業、友人……等、教室で扱う作品にはどうしてもテーマが必要なのである。

松本清張の作品は、おそらく今までに一度も教科書に採られたことはなかつたように思う。しかし、清張作品は推理小説であってもそこに必ず人間が登場し、その葛藤が描かれる。そこには、愛、憎しみ、努力、うぬぼれ、人生……等のテーマが存在し、登場人物は我々と等身大の隣人である。「社会派」と言われる所以である。その文体も工夫・洗練され、読者をグイグイ引き込んでゆき、読むものを飽きさせない。また、情景描写・心理描写も非常に巧みである。

しかし、今まで清張作品が教科書に採られなかつた理由の一つは、まず作品の長さである。短編といえども清張作品は一つの作品が長い。テーマを持っているとはいっても推理小説はカットできない。二つ目は使用言語の問題である。人間や社会の不条理を描いた作品が多いため、どうしても教室では扱えない言葉が存在する。

しかしながら、もし、清張作品のなかで教科書教材に耐え得るものがあるとしたらとの問いか

けに、私は前出の『或る「小倉日記」伝』をあげたい。なぜなら、この作品はテーマ性の高い純文学作品であるからである。そして、そのテーマそのものが非凡なのである。

従来わが国の文学は「勸善懲悪」、「努力は必ず報われる」、「不幸の後に幸福あり」、「ハッピーエンド」など、人生というものは苦勞をすれば最後は報われるものだ、というテーマのもとに作品が構成され、また多くの読者を得てきた。しかし、現実には必ずしも「努力は必ず報われる」わけではない。しかし、努力には意味があるのだ、ということを見せてくれるのがこの作品である。

『或る「小倉日記」伝』の教材化

以下に、本文の全文を掲載するが、その中、実線で囲んだ部分がトリミングすなわち教科書としてカットする箇所である。

つながりの悪い箇所は、接続語を変える必要があるが、現段階では編集作業はせず、原文のままとした。



或る「小倉日記」伝

—

(明治三十三年一月二十六日)

終日風雪、そのさま北国と同じからず。風の^{いつたい}一堆の暗雲を送り来るとき、雪花^{ひるがえ} 翻り落ちて、天の一隅には却りて日光の青空より洩れ出づるを見る。九州の雪は冬の夕立なりともいふべきにや。

(森鷗外「小倉日記」)

昭和十五年の秋のある日、詩人K・Mは未知の男から一通の封書をうけとった。差出人は、小倉市^{ぼくろうまち}博勞町二八田上耕作とあった。

Kは医学博士の本名よりも、^{たんび}耽美的な詩や戯曲、小説、評論などを多く書いて有名だった。南蛮文化研究でも人に知られ、その芸術は江戸情緒と異国趣味とを抱合した特異なものと言われている。こうした文人に未知の者から原稿が送られてくることは珍しくない。

が、この手紙の主は詩や小説の風稿を見てくれというのではなかった。文意を要約すると、自分は小倉に居住している上から、目下小倉時代の森鷗外の事跡を調べている。別紙の草稿は、その調査の一部だが、このようなものが価値あるものかどうか、先生に見ていただきたい、というのであった。田上という男は当てずっぽうに手紙を出したのではなく、Kと鷗外との関係を知っていたの上のことらしかった。

Kは同じ医者である鷗外に深く私淑し、これまで「森鷗外」、「鷗外の文学」、「或る日の鷗外先生」など鷗外に関する小論や随筆をかなり書いてきていた。現に、その年の春、「鷗外先生の文体」を雑誌『文学』に発表したばかりであった。

Kが興味を起こしたのは、この手紙の主が小倉時代の鷗外を調べているということである。鷗外は第十二師団軍医部長として、明治三十二年から丸三年間を小倉に送っているが、この時書いた日記の所在が現在不明になっている。これはKも^{へんきん}編纂委員である岩波の『鷗外全集』が出るに当たって、その日記編に収録しようと、当時、百方手をつくして捜したのだが、ついにわからなかった。世の鷗外研究家は重要な資料の欠如として残念がっていたものである。

この田上という男は丹念に小倉時代の鷗外の事跡を捜して歩くとやっている。根気のいる仕事だ。四十年の歳月の砂がその痕跡を埋め、もはや鷗外が小倉に住んでいたということさえこの町で知った者は稀だと、この筆者は言うのだ。当時、鷗外と交遊関係にあった者は皆死んでいる。だから、その親近者を捜して鷗外に關した話が残っていれば聞こうというのだった。実際の例が書いてある。読んでみて面白かった。研究も草稿も途中のものである。完成させたらかなりのものができそうに思えた。文章もしっかりしていた。

彼は五六日して返事を書いて出した。五十五歳のK・Mは相手が青年であることを意識して、充分激励をこめた親切な手紙であった。

それにしても、この田上耕作という男は、どのような人物であろうかと、彼は思ったことである。

二

田上耕作は明治四十二年、熊本で生まれた。

明治三十三年ごろ、熊本に国権党という政党があり、大隈の条約改正に反対して結成された国粹党であるが、佐々友房が盟主で当時全国的にも有名であった。この黨員に白井正道という者がいて、佐々と共に政治運動に一生を送った。

白井には、ふじという娘がいた。美しいので評判であった。あるとき熊本に來た若い皇族の接待役を水前寺庭園につとめたが、林間の小徑を導くふじの容姿は、いたく若い宮の心を動かした。宮は帰京すると、ぜひあの娘を貰ってくれと言いだして、側近を愕かせたと、今でも熊本に話が残っている。

ふじの美しさは年とともにあらわれて、縁談は降るようであった。いずれも結構な話だったが、白井の政党的な立場から考えて、どれもまとまらなかった。つまり一方を立てれば、他方の義理がすまぬというわけだ。白井が自分の甥の田上定一にふじをめあわせたのは全く窮余の結果であった。これなら、どこからも恨みを買うことはなく、彼は諸方への不義理を免れた。田上走一にとっては、ふじのような美人を得たことは、いわば漁夫の利といえないこともなかった。

二人は結婚して一男を産んだ。これが田上耕作である。明治四十二年十一月二日生と戸籍に届けた。

この子は四つになっても、なぜか、舌が回らなかった。五つになっても、六つになっても、言葉がはっきりしなかった。口をだらりとあけたまま涎をたらした。そのうえ、片足の自由がきかず引きずっていた。

両親は心労して、諸所の医者にみせたが、どこもはっきりした診断をくださなかった。神経系の障害であることはわかったが、病名は不明だった。Q大にもみせたが、ここでもわからないのだ。多くの医者は小児麻痺だろうと言ったが、ある医者の言う頸椎付近に発生した何か腫物のようなものが緩慢に発達して、神経系を冒したのではないかとの想像のほうが実際に近いかもしれない。治療の方法はないということである。

自分の義理合いばかりで、この結婚をさせた白井正道も、このような不幸の子が生まれたことに何か責任のようなものを感じ、大いに心配して、人にもいろいろききまわり、治療費も出した。

白井は政治運動をやる一方、実業にも少しは手を出したとみえ、門司を起点とする九州鉄道会社の創立にも与かった。これが現在の国鉄鹿児島本線になる。白井は、だから、この鉄道敷設の功労者の一人だ。

田上定一が九州鉄道会社にはいったのは白井の世話による。田上の一家は勤めの関係で小倉に移ったが、これは耕作が五つの時であった。白井はこの地の博労町に地所を買い、娘夫婦に家をたててやり、五六軒の家作もつけた。もともと政治運動に没頭して、伝来の家財を蕩尽した白井は、金儲けはへたで、生涯これという産はなさなかった。ふじが親からしてもらったのは、この家ぐらいなものである。

博労町は小倉の北端で、すぐ前は海になっていた。海は玄界灘につづく響灘だ。家には始終荒浪の音がしていた。耕作はこの浪の響きを聞きながら育つた。

耕作には、六つぐらいのころ、こういう一つの思い出がある。

父の家作に貧しい一家があった。老人夫婦と五つぐらいの女の児であったが、夫婦はこの子の親ではないらしかった。

六十ぐらいの、その白髪頭のじいさんは、朝早くから働きに出ていった。色の槌せた法被をきて、股引をはき、わらじを結んでいた。じいさんは手に柄のついた大きな鈴をもっていて、歩きながらそれを鳴らすのである。

耕作の両親は、この一家を「でんびんや」と呼んでいた。「でんびんや」は、どうやらじいさんの職業であるらしかった。でんびんやとは何のことか耕作にはわからなかった。が、彼はよくおじいさんの家に遊びにいった女の児と遊んだ。女の児は眼の大きい、色の白いおとなしい子であった。彼が遊びにいくと、ばあさんはよろこんで干餅などを焼いてくれた。

耕作の言葉は舌たるくて、たどたどしく、意味がわからなかった。左足は麻痺で、跛だ。じいさん、ばあさんが彼に親切だったのは、家主の子という以外に、こういう不幸な身体に同情したのであろう。彼は後年こういう憐憫には強い反発を覚えたが、六歳の彼にはまだこのような感情があるわけではなく、老夫婦の歓待に甘えた。女の児は、お末ちゃんといったが、他に遊び友だちのない彼にとっては唯一の相手だった。そして、言ってみれば、彼が最初にほのかに愛した子であった。

じいさんは朝早く家を出ていって、耕作がまだ床の中にいるころ表を通った。ちりんちりんという手の鈴の音はしだいしだいに町を遠ざかり、いつまでも幽かな余韻を耳に残して消えた。耕作は枕にじっと顔をうずめて、耳をすませて、この鈴の音が、かほそく消えるまでを聞くのが好きだった。それは子供心に甘い哀感を誘った。日が暮れて、じいさんは帰りも通る。

ああ、今、でんびんやさんが帰る、と父も晩酌を傾けながら、鈴の音が耳にはいると、眩くことがあった。じいさんは、そのようにおそくまで働いた。秋の夜など響灘の浪昔に混じって、表を通る鈴の音を聞くのは、淡い感傷であった。

この、でんびんやの一家は一年ばかりいて、とつぜん夜逃げをしてしまった。六十をこしたじいさんの働きではやっていけなかったのであろう。耕作が行ってみて、家に戸が堅く閉まり、父の筆で“かしや”の紙が貼ってあるのは、何か無慙な気がした。耕作は老人一家が今ごろどうしているであろうかとたびたび考えた。じいさんの振る鈴の音はもう聞けなくなった。もしかすると、知らぬ遠い土地で、あの鈴を鳴らしているかもしれないと思うと、ひとりで、その土地の景色まで想像した。

この思い出は、彼を鷗外に結ぶ機縁となるのである。

三

田上定一は耕作が十歳の時に病死したが、死ぬまで耕作の身体を苦しめた。言葉のはっきりし

ない、口も始終あけ放したままで涎をためている跛のわが子の姿は親としてたまらなかつたであろう。いろいろな医者にかかった。近在ばかりでなく博多、長崎まで連れていったが、どこの医者も首を傾けた。はっきりした病名さえわからない。祈禱きとうや民間療法のようなものにも迷った。田上家の財産らしいものは、ほとんどこの子のむだな療養に費消された。

定一が死んだ時、ふじは三十歳であった。ようやく中年に達して、美貌びぼうは一種の高雅さえ添えた。再縁の話は諸所から持ちこまれた。熊本の方から相当に話があったのは、十年前、聞こえた美人であったからである。

そのいっさいをふじは断わった。縁談の中にはずいぶんうまい話もあって、耕作の療養にはどんな大金も惜しまず注ぎこんでやるというものもあった。が、ふじはそういう相手の申し出は、どこまでが本当であるかわからず、言ってみれば好餌こうじとしか考えられなかつた。どこに縁づくにしても、耕作を手ばなす気にはなれず、連れていけばこういう病気の子が婚家先でどんな扱いをうけるか、知れていた。彼女は生涯耕作から離れまいとし、再婚の意を絶った。生計は切りつめていけば、五六軒の家作の家賃で立てていった。

耕作は小学校に上がったが、口を絶えずあけ放したままで、言語もはっきりしないこの子は、誰が見ても白痴のように思えた。が、実際は級中のどの子よりもよくできた。話ができないので教師は口答はなるべくさせなかったが、試験の答案はいつも優秀だった。これは小学校だけの間でなく、私立の中学校にもあがらせたが、ここではズバ抜けた成績をとった。

ふじのよろこびは非常であった。これが正常な身体であつたらと、不覚に涙を出すこともあったが、ともかく頭脳が人並以上と思えたことは、うれしいかぎりであった。母一人、子一人である。こんな身体でも、ふじから見れば杖つえとも柱とも頼りに思えるのであった。

そのころ、すでにふじの実父白井正道は死んでいて、一生を政治運動に狂奔したから死んでみると遺産はなく借金が残った。白井家は熊本藩の家老いえがらの家柄で名家であったが、正道一代で家財を蕩尽してしまった。遺族は借金にいつまでも苦しまねばならなかつたから、ふじは実家から何らの助力も得られなかつた。

学校の成績のよかつたことは、耕作自身にも、多少、世間に対して、自信らしいものをつけさせ、不具者もつ、ひけめな暗い気持ちから救った。が、やはり孤独はまぬがれない。彼は文学書を好んで読むようになった。

耕作の中学時代からの友人に江南鉄雄えなみてつおという男がいた。江南は文学青年で、この地方の商事会社につとめながら、詩など書いていた。勤務中でも、ひろげた帳簿の下に原稿紙をしのばせて、こっそり何か書いているような熱心さだった。彼は耕作と不思議に気が合つて、耕作の生涯中、ただ一人の友人であった。

ある日、江南は耕作に一冊の小説集をもってきて見せて言った。「これは森鷗外の小説だが、この中の『独身』というのを読んでみる。鷗外が小倉にいたころのことが書いてあるから面白いよ」

耕作はそれを借りて読んだが、その中の文章ははからずも彼の心を打った。あまり感動が大きくて、数日はそればかりが頭から離れなかつた。それは「独身」の中の一節だ。

く外はいつか雪になる。をりをり足を刻んで駈かけて通る伝便の鈴の音がする。伝便いでと云つても余所のものには分かるまい。これは東京に輸入せられないうちに、小倉へ西洋から輸入せられてゐる二つの風俗の一つである。(略)

今一つが伝便なのである。Heinrich von Stephanハインリヒフォンステファンが警察国しに生れて、巧に郵便の網を天下に布しいてから、手紙の往復に不便はずはない筈ではあるが、それは日を以て算し月を以て算する用弁もつの事

である。一日の間の時を以て算する用弁を達するには、郵便は間に合はない。Rendez-vous をしたつて、明日何処で逢はうなら、郵便で用が足る。併し性急な恋で、今晚何処で逢はうとなつては、郵便は駄目である。そんな時に電報を打つ人もあるかも知れない。これは少し牛刀鶏を割く嫌がある。その上厳めしい配達の為方が殺風景である。さういふ時には走使が欲しいに違ない。会社の徽章の附いた帽を被って、辻々に立つてゐて、手紙を市内へ届けることでも、途中で買って邪魔になるものを自宅へ持って帰らせる事でも、何でも受け合ふのが伝便である。手紙や品物と引換に、会社の印の据わつてゐる紙切をくれる。存外間違はないのである。小倉で伝便と云つてゐるのが、この走使である。

伝便の講釈が、つい長くなった。小倉の雪の夜に、戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音がちりん、ちりん、ちりん、ちりと急調に聞えるのである。

耕作は幼時の追憶がよみがえつた。でんびんやのじいさんや、女の児のことが眼の前に浮かんだ。あの時はでんびんやとは何のことか知らなかつた。今、思いがけなく、その由来を鷗外が数えた。

〈戸の外の静かな時、その伝便の鈴の音がちりん、ちりん、ちりん、ちりと急調に聞えるのである〉は、そのまま彼の幼時の実感であつた。彼は枕に頭をつけて、じいさんの振る鈴の昔を現実に関く思いがした。

耕作が、鷗外のものに親しむようになったのは、こういうことを懐かしんだのが始まりだつたが、鷗外の枯淡な文章は耕作の孤独な心に応えるものがあつたのであろう。

四

ふじは耕作の将来を考えて、洋服の仕立屋に弟子入りさせた。手職をつけさせるためだ。が、彼は三日と辛抱ができなかつた。左手が不自由であつたせいもあるが、職人という世界が気に合なかつた。ふじも強いては言わず、以後、耕作は死ぬまで収入のある仕事につけなかつた。ふじの裁縫の賃仕事と、家作の家賃とで生計をたてた。耕作の風貌は、知っている者は今でも語り草にしている。六尺近い長身で、顔の半面は歪み、口は絶えず閉じたことがない。だらりとたれた唇は、いつも涎で濡れて艶光りがしてゐた。これが片足を引きずつて、肩を上下にゆすつて歩くのだから、路で会つた者は必ず振りむいた。痴呆としか思えなかつたのである。

耕作は街の中を出歩いて、他人がどんな眼つきで自分を見ようといっさい関りのないふうに見えた。江南のいる会社にもかまわずに現われた。女事務員などは見世物でも来たように、わざわざ椅子から背伸びして見る。

耕作の言葉は吃りのうえに、発音がはっきりしない。江南は慣れているが他人には意味がよくとれなかつた。

「江南君、ありや痴呆かい？」

と耕作が帰つたあと、誰でもにやにやとしてきた。

何を言う、あれで君たちよりましだぞ、江南は反発して答える。実際、江南は耕作を尊敬してゐた。耕作が少しも自分の悲惨な身体を暗いものに考えないのにひそかに感心してゐた。

が、江南にもわかつてゐない。耕作が自分の身体に絶望してどのように煩悶しているかは、他人にはわからないのだ。ただ煩悶して崩れなかつたのは、多少とも頭脳への自負からであつた。言つてみれば、それは羽根のように頼りない支えではあつたが、唯一の希望でないことはなかつた。どのように自分が見られようとも、今にみろ、という気持もそこから出た。それが、たつた

一つの救いであった。

だから、他人は知るまいが、時には彼はわざと阿呆のポーズさえ誇張して見せた。これを擬態だと思い、時には自分の本来の身体さえ擬態のように錯覚してわずかに慰めた。人が嗤っても平気でいられた。こちらから笑ってやりたいくらいである。自分の肉体をわざと人前に曝しているようで、自分ほど手を掩うようにしてかばっているものはないのだった。

そのころ、小倉に白川慶一郎という医者があった。大きな病院を持っていた。どこの小都市にも一人はいる指導的な文化人だ。資産家で蔵書が多い。地方の俳人、歌人、画家、文学青年、郷土史家などが集まって会をつくり、自分でもそのグループの中心におされ、パトロンともなった。病院の経営は順調なのだ。一つの地方の勢力である。先代の菊五郎でも羽左衛門でも、この地方の興行の前には必ず挨拶に来たくらいである。

白川を知っていた江南は耕作をつれていって紹介した。白川は五十近い長身の大男である。君は本が好きかと彼は耕作にきいた。好きです、と耕作が答えると、それならおれの書庫の目録をつくるのを手伝うがよい、と言った。耕作が、白川の書庫に自由に出入りしだしたのはそれからだ。そこには保存のよい本が三万冊近くあった。哲学、宗教、歴史から文学、美術、考古学、民俗学など図書館のようであった。本道楽の白川が買いこんだものである。

耕作はほとんど毎日来た。本の整理は別に一人いたから、彼には別段の仕事はなく、たいていは本を読んで暮らした。この書庫のある母屋と病院とは離れていたが、その間は長い渡り廊下でつないでいた。看護婦がしきりとそこを往来した。この女たちをちらちら見ることも愉しみでないことはなかった。

白川病院の看護婦たちは美人ばかり集めているという評判だった。夜になると白川は何人かの看護婦をつれて街に散歩に出かける。行きあう人が一行を振りかえらずにはおられない。美しい女たちを引き具して押しだしていく長身の白川は悠然と人の注目をあつめた。時には耕作も皆のあとからついていくことがあった。片足をひきずり、口を野放図にあけて涎を見せて歩く耕作の格好で一行に一種の対照の妙ができた。人は必ず失笑した。が、耕作の才分を認めていた白川は気にもせずにつれてまわった。耕作にとって白川に識られたことは一つの幸福であった。

白川はかねてから論文を書く準備をしていた。母校のQ大に出すつもりだった。テーマは“温泉の研究”である。資料はかねがね集めていた。が、忙しい仕事をもっている白川は、一々、汽車で二時間もかかるQ大まで頻繁に出向くわけにはいかなかった。これが日ごろからの悩みだったが、白川が思いついたのは耕作を使うことだった。要領を言って、参考文献を書き写してくる仕事である。

耕作は一年以上Q大へ通った。白川が予見したとおり耕作の熱心は非常だった。

ものを調べるといふ興味はこの時から耕作の身についたのであろうか。

“温泉の研究”は不運にも他に同じテーマで学位をとった者が現われ、白川は研究の意欲を失ってしまった。耕作の努力も水泡に帰した。が、このことから白川の気持は耕作の面倒をかなり見るまでになった。

白川は毎月の新刊書を耕作たちが言うままに買った。一々、自分が読むわけではない。“白川蔵書”の判を押しして書庫にならべさせた。耕作のすることは整理番号をつけることとそれを読むことだ。そのころ、岩波版の『鷗外全集』が出版された。昭和十三年ごろである。

五

『鷗外全集』第二十四巻後記は、鷗外の小倉時代の日記の散逸したしだいを載せている。

鷗外は明治三十二年六月、九州小倉に赴任した。以来三十五年三月東京に帰るまで満三カ年をこの地で送った。この時代につけていた日記は人に頼んで清書し保存していたが、全集を出すときに捜してみても所在が知れなかった。日記があったことは、観潮楼の書庫の一隅にある本箱の中で見たと近親は言っている。誰かが持ちだしたまま行方がわからなくなったという。この捜索は編集者も書店も“百方手をつくした”が、ついに発見できなかった。

鷗外が小倉に来た時は、年齢も四十前という男ざかりである。その独身生活は簡素をきわめ自ら後の作品「独身」、「鷄」に出てくるような風姿であった。その後、母のすすめる美人の妻と再婚したのもここである。満三年間の「小倉日記」の喪失は世を挙げて惜しまれた。いよいよ失われて無いとなると、「小倉日記」は、そのかくれている部分の容積と重量を人々に感じさせたのだった。

耕作の心を動かしたのはこの事実を知ってからだ。幼時の伝便の鈴の思い出がはからずも鷗外の文章でよみがえって以来、鷗外を読み、これに傾倒した。いま、「小倉日記」の散逸を知ると未見のこの日記に自分と同じ血が通うような憧憬さえ感じた。耕作がいわゆる足で歩いて資料を集め、鷗外の「小倉生活」を記録して失われた日記に代えようとした着想はどうして得たであろうか。そのころは柳田国男の民俗学が一般に流行しだした時だった。白川のグループの青年たちの間にも民俗学熱があがり、『豊前』という雑誌まで出した。同人たちは郷土から資料を“採集”し、毎号の誌上にのせた。耕作も初めは郷土誌の上から小倉時代の鷗外を考えていたが、民俗学の“資料採集”の方法を見て、しだいに「小倉日記」の空白を埋める仕事を思いついた。小倉時代の鷗外を知っている関係者を捜してまわり、どんな片言隻語でも“採集”しようというのだ。

耕作はこれに全身を打ちこむことにした。鉦脈をさぐりあてた山師のように奮いついた。一生これと取りくむのだと決めた。

が、これを聞いて一番よろこんだのはふじだった。わが子が初めて希望に燃えついたので。何とかして成功させてやりたかった。

ふじはもう五十に近くなっていた。が、外見は美貌のため四十ぐらいにしか見えなかった。これまで幾多の誘惑があった。それを切りぬけ、耕作を唯一のたよりとして生きてきた。あんな不具の子にというのは関りのない世間の話だ。実際、ふじは耕作にわが夫のように仕え、幼児のように世話をした。もつれた舌でわが子が鷗外のことを話すのを、いかにもうれしそうな顔をしてこの母は聞いていたのである。

当時、小倉の町に長い髯^{ひげ}をたれ、長身を黒い服に包んだ老異国人があった。香春口に教会を持つカトリックの宣教師で、仏人F・ベルトランといった。よほどの老齢であったが、小倉に在住していたころの鷗外にフランス語を教えた人である。

耕作はまずベルトランを訪ねた。

ベルトランは耕作の異常な身体を見て、病者が、魂の救いを求めにきたと思ったに違いない。が、耕作のたどたどしい言葉で、鷗外の思い出を話してくれと聞かされて柔和な眼を皿のように大きくした。むろん、何にするのだと反問した。耕作の説明をうけると、両手をこすりあわせて、それはいい考えだと髯^{ほお}の頬を微笑させた。

「ずいぶん昔のことで、わたしの記憶もうすれている。しかし森さんはもっとも強い印象をわたしに残した」

ベルトランは巴里パリに生まれ、若いころ日本に来て、四十年以上も日本にいたから日本語は自在であった。七十の老齡しわの皺を顔にたたんでいたが、澄んだ深い水の色の瞳ひとみをじっと宙に沈ませて、遠い過去を思いだしながら、ぽつり、ぽつりと話した。

「森さんはフランス語に熱心でした。週のうち、日、月、水、木、金、と通ってきました。時間は正確で、長い間遅刻はなかった。ある時など、師団長の宴会があるのに、ここに来たので従卒が心配して馬をひいて迎えにきたくらいです」

匂いのいい煙草たばこのパイプをふかしながら言うのだった。

「ここにフランス語を習いにくる人は、他にもたくさんあったが、ものになったのは森さんだけで、これはズバ抜けていました。もっともあれだけの独逸語ドイツの素養があったせいもあります。ここには役所ひが退けるといったん家に帰ってすぐ来ました。キモノに着替えて葉巻をくわえ途中の道を散歩しながら来るのだと言っていました。歩いて三十分の距離です」

こういうことから話して、だんだん思いだしながら聞かせてくれた。耕作は二三日通ってメモをとった。

江南に見せると、

「なかなかいいじゃないか。この調子この調子。いいものになるよ」

と励ましてくれた。江南の友情は耕作の生涯しょうがいに一つの明かりとなった。

ベルトランはフランスに帰るのだと、うれしそうにしていたが、まもなく小倉で死んだ。

六

次に耕作は“安国寺さん”の遺族を訪ねたいと思った。短編「二人の友」では安国寺さん、「独身」では安寧寺さんあんねいじとなっている。

〈安国寺さんは、私が小倉で京町ちやうの家あに引き越した頃から、毎日私の所へ来ることになった。私が役所から帰って見ると、きつと安国寺さんが来て待ってゐて、夕食の時このあひだまでゐる。此間に私は安国寺さんにドイツ文の哲学入門の訳読をして上げる。安国寺さんは又私またに唯識論の講義をしてくれるのである〉（「二人の友」）

その安国寺さんは、鷗外が東京に帰ると、別れるに忍びず、あとを追って東京に出る。しかし田舎ちやがにいる時と異って鷗外は忙しい。ドイツ語はF君一後の一高教授福間博が代わって教えるが、基本たから叩きこむのでなかなか苦しい。安国寺さんは仏典に通じ鷗外に唯識論の講義をするくらい学識があったし、鷗外からはドイツ語の初歩をとばして、最初からドイツ哲学の本を逐語的に、しかもつとめて仏教語を用いて訳してもらって理解していたが、F君の一家語格上から分析せずにはおかない教授法に閉口する。高遠な哲理を解する頭脳を持った安国寺さんも、年齢をとっているとので、名詞、動詞の語尾変化の機械的暗記に降参してドイツ語の勉強をやめる。鷗外が日露役で満州に行っている間に、病にかかって帰郷した。

〈私は安国寺さんが語学のために甚はなはだしく苦んで、其病そのを惹ひき起したのではないかと疑った。どんな複雑な論理をも容易たやすく辿たどつて行く人が、却そって器械的に諳そらんじなくてはならぬ語格の規則に悩まされたのは、想像しても気の毒だと、私はつくづく思った。満州で年を越して私が凱旋がいせんした時には、安国寺さんはもう九州に帰ってゐた。小倉に近い山の中の寺で、住職しゆしやくをすることになったのである〉（「二人の友」）

安国寺さんの本名たまみずしゆんこは玉水俊虎といった。大正四年の鷗外日記には、〈十月五日。僧俊虎の訃ふ至る。福岡県企救郡西谷村護聖寺の住職なり。弟子玉水俊麟に弔電やを遣る〉とある。

病気は肺患であった。俊虎は青年のころ、相州小田原の最上寺の星見典海に私淑して刻苦勉強し、その無理から病いを得る原因をつくつた。

俊虎に子はなかった。護聖寺も何代となく人が替わっていた。

耕作は西谷村役場にあてて俊虎の縁故者の有無を問いあわせた。役場の返事では、「俊虎師の未亡人玉水アキ氏は現在も健在で、当村字三岳片山宅に寄寓している」
とのことであった。

鷗外のいう“小倉に近い山の中”といっても、そこは四里以上あった。二里のところまではバスが通うが、それから奥は山道の徒歩である。

耕作は弁当の**かばん**を肩から吊るし、水筒を下げ、わらじをはいて出かけた。ふじが気づかったが、大丈夫だと言って出発した。

バスを降りてからの山道はひどかった。そのうえ、一里以上は歩いたことのない耕作にとって普通人の十里以上にも相当した。何度道端に腰をおろしたかしれなかった。息切れがして、はあはあ肩で呼吸した。

が、それはちょうど晩秋のことで、山は紅葉が色をまぜていた。林の奥からはときどき、**もず**の鋭い**さえず**りが聞こえるほか、秋陽の下に静まった山境は町の中では味わえない興味があり、耕作の難儀をいくぶん慰めた。

三岳部落は山に囲まれた袋のような狭い盆地にあった。白壁と赤瓦の家が多いのは、北九州には珍しかった。裕福な家が多いと見え、どこの構えも大きい。山腹に寺門が見えるのが護聖寺であった。耕作は今でもその屋根の下に“安国寺さん”が住まっているような気がして、しばらく立ちどまって見入った。

片山の家をたずねると、護聖寺のすぐ下であった。が、ここまで耕作がくると、いつか彼の背後には好奇心な眼を光らした部落の者たちが集まっていた。跛で、特異な顔をした耕作が珍しいのだ。

田から帰って庭先で牛から犁を降ろしていた片山の当主というのは、六十ぐらいの百姓だったが、これも耕作を見て呆れたように立っている。この相手に耕作の来意が通じるのは骨の折れることだった。どんな用事だ、玉水アキは自分の姉だが、と彼は、やがてにやにや笑いながらきいた。薄ら笑いは耕作の人体を見た上でのことなのである。

耕作はできるだけ、ゆっくり事情を説明した。が、不明瞭な発音で、オウガイ、オウガイとくり返しても、老農には何のことかわからなかった。彼は啞か阿呆を見るように、姉は居らんからわからん、と手真似をまじえて言った。

二里の山道を耕作は空しく引き返した。帰路は石のように重い心で疲労はいっそうだった。

ふじは帰ってきた耕作の姿を一目見ると、その疲れきった顔色で、どういう結果だかすぐ察してしまった。

「どうだった？」

ときいてみると、耕作は急には物の言えないような疲労のはげしい身体を畳に仰向けて、大儀そうに留守だったと呟くように答えた。それで、彼がどういう仕打ちをされたか、ふじにはすぐわかった。不愠でならなかった。

「明日、もう一度行ってみよう、お母さんも一緒にね」

と、やがてふじは励ますように言った。

その翌日、ふじは朝早くから人力車を二台雇った。途中のバスの停留所からは乗物の便がないのでここから乗って行くより仕方がなかった。往復八里だ。この俵賃だけでふじの切りつめた生

活費の半月分にも当たった。せっかくの耕作の希望の灯をここで消させたくない一心である。

田舎道を人力車が二台連らなって走るのは婚礼以外に滅多に見られぬ景色であった。畑にいる者はのびあがって見た。片山の家では呆気にとられた。

ふじは来意を述べたが、手土産をさしだし、上品な物腰とおだやかな挨拶は、先方を恐縮させた。わかってみれば、やはり田舎の人なのだ。二人を座敷に上げ、ちょうど居合わせた老婆をひきあわせた。

玉水アキはこのとき六十八歳、小柄な、眼に愛嬌のある老嫗だった。計算すると、夫の安国寺さんとは二十近くも年齢が違っていた。聞けば俊虎とは初婚で、村の者が護聖寺に居つくよう無理に嫁にとらせたということであった。したがって鷗外が小倉にいるころは、まだ嫁にきていないのだ。

しかし生前の夫俊虎から、小倉の鷗外のことを、やはりいろいろ聞いていた。

七

耕作はともかくこれまでのベルトランと俊虎未亡人との話のメモをまとめて草稿をつくり、東京のK・Mのもとに送った。Kをえらんだのは、かねてその著書も読んでいたし、『鷗外全集』の編集委員の一人であることも知っていたからだ。

耕作はKに手紙を書いて、まだ途中のものだが、このような調査が価値のあるものかどうか先生に見ていただきたいと請うた。

これは全く彼の本心からの声だった。自分だけでは安心ができなかった。何か自分がひどく空しいことに懸命になっているような不安にたびたび襲われた。ここで誰か権威ある人にきいてみないと心が落ちつけなかった。意義のないことに打ちこんでいる一種のおそれであった。Kに手紙を出したのは、全くそれを確かめるためだった。二週間ばかりたって、良質の封筒の裏に名前が印刷されたKの手紙をうけとった。耕作は胸を躍らしてしばらく封を切るのが怖かった。返事は次のとおりだった。

拝啓

貴翰 並 貴稿拝見しました。なかなかよいものと感心しています。まだはじめのことで何とも言えませんが、このままで大成したら立派なものができそうです。小倉日記が不明の今日、貴兄の研究は意義深いと思います。せっかく、ご努力を祈ります。

来た、と思った。期待以上の返事であった。みるみる潮のように、うれしさが胸いっぱいにとつと溢れてきた。文面を繰り返して読めばよむほど、歓喜は増した。

「よかった。耕ちゃん、よかったねえ」

とふじは声はずませた。母子は顔を見合ったまま、涙ぐんだ。これで、耕作の人生に希望がさしたかと思うと、ふじはうれしさをどう表わしようもなかった。自分の心も暗い地の底からやっと出口の光明を見た思いだった。ふじはKの手紙を神棚に上げ、その夜は赤飯を炊いた。

白川のところへ耕作は手紙を見せにいくと、白川は何度も読み直してはうなずき、よろこんでくれた。江南などはわがことのように興奮して、K先生からこんな手紙をもらうとはたいしたものだ、会う者ごとに吹聴した。

さあ、これで方向は決まった、と耕作は急に自分が背伸びして、胸の鳴るのを覚えた。

が、これから後の調べはすすまなかった。鷗外が初め移った家は鍛冶町だった。これは現在あ

る弁護士が住んでいるが、家主はずっと以前から宇佐美という人だった。耕作は母と一緒に宇佐美を訪ねた。ふじがついてきたのは三岳に行ったときの経験からだ、以来ずっとふじが耕作の通訳のような形でつきそったのである。

宇佐美の当主は老人だったが、来意を聞くと、さあ、と言って首を傾げた。私は養子にきたのだから何にも知らぬ、家内が子供の時にかわいがられたそうだから、家内にきけば何か覚えているかもしれぬ、しかしなにぶん、古いことですからなあ、と笑って老妻を呼んだ。

小説「鶏」はこの家である。だから耕作はぜひ何か聞いたかった。しかし、呼ばれて出てきた老婦人は眼尻にやさしい皺をよせて笑っただけで、

「もう、何一つ覚えておりませんよ。なにぶん私が六つぐらいの時ですからね」

と答えるだけであった。

鷗外はこの家から新魚町しんさかなまちの家に移った。ここは「独身」に、

〈小倉の雪の夜の事であった。新魚町の大野豊あづまの家に二人の客が落ち合った〉

と出ている家だ。

現在はある教会になっているが、鷗外のいたころの家主は、誰にきいても、全然わからなかった。耕作はふと市役所の土木課で調べることを思いつき、明治四十三年までさかのぼった帳簿ふなまちで調べてもらおうと、当時その土地の所有者は東あづまという人であることがわかった。この人の孫が舟町ふなまちにいることを探しだし、あるいはきけばわかるかもしれぬと思い、訪ねていってみると、そこは遊廓ゆうかくだった。

東某あづまという妓楼の亭主は耕作の身体を意地悪く見ただけで、鷗外に関係したことは何も知ってはいなかった。

「そんなことを調べて何になります？」

と、傍らかたわのふじに言いすてただけだった。

そんなことを調べて何になる——彼がふと吐いたこの言葉は耕作の心の深部に突き刺さって残った。実際、こんなことに意義があるのだろうか。空しいことに自分だけが気負いたっているのではないかと疑われてきた。すると、不意に自分の努力が全くつまらなく見え、急につきおとされるような気持になった。Kの手紙まで一片の世辞としか思えない。たちまち希望は消え、真っ黒い絶望が襲ってくるのだった。このような絶望感は、以後ときどき、とつぜんに起こって、耕作が髪の毛をむしるほど苦しめた。

ある日、耕作が久しぶりに白川病院に行くと、一人の看護婦が、なれなれしそうに近づいてきた。山田てる子という眼鼻立ちのはっきりした娘だった。

「田上さんは森鷗外のことを調べているって先生がおっしゃったけど、本当なの？」ときいた。てる子てるこの話は耳よりだった。何でも自分の伯父は広寿山の坊主だが、鷗外がよく遊びに来たことを話していた、行ってたずねれば何か面白いことがわかるかもしれない、というのだ。

耕作はにわかに青空を見たように元気づいた。

「あなたが行く時、わたしが案内するわね」

と、てる子は言ってくれた。

耕作は期待をもった。広寿山というのは小倉の東に当たる山麓さんろくの寺で福聚禅寺ふくじゅぜんじといった。旧藩主ぼだいじの菩提寺で、開基は黄檗おうぼくの即非そくひである。鷗外は小倉時代に「即非年譜」というのを書いているから、よく広寿山を訪れたかもしれない。そのころの寺僧がまだ生きていたとすれば、思わぬ話が聞けるかもしれなかった。

それは暖かい初冬の日だった。耕作は山田てる子と連れだつて広寿山に登った。歩行のろの緩い耕

作にてる子は足を合わせて、よりそった。林の中に寺があり、落葉を焼く煙が木立の奥から流れていた。

てる子の伯父というのは、会ってみると、七十ぐらいの老僧だった。

「森さんは、寺の古い書きものや、小笠原家の記録など出してあげると、半日でも丹念にみておられた。先代の住職が生きていたら、もっとわかるのじゃがな。三人が話をしているのを、わたしはよく遠くから見かけたものじゃ」

僧は茶を啜りながら、こうも言った。

「一度、奥さんと一緒に見えたことがある。奥さんの記憶はないが、この寺で奥さんの詠まれた歌をご存知か」

老僧は干乾したような頭を傾けて思いだすように、その文句を考えると、紙に書いて見せた。

仏子持つ即非画像がわが背子に似ると笑ひし梅散る御堂

鷗外が新妻と浅春の山寺に遊んだ情景が眼に見えるようだった。

「そうじゃ、森さんは禅にも熱心でな、毎週日をきめて同好の人と集まっていたよ。堺町の東禅寺という寺じゃ」

八

耕作とてる子はあとで開山堂の方に回った。暗い堂の中には開基即非の木像が埃をかぶって、くすんだ黝い色ですわっていた。

「鷗外さんて、こんな顔に似てたのかしら」

と、てる子は白い歯なみを見せておもしろそうに笑った。即非の顔は怪奇であった。二人は林を抜けて下山にかかった。道の両側は落葉が堆積もって、葉を失った裸の梢の重なりから、冬の陽射しが洩れおちていた。足の不自由な耕作は、てる子に手をとられていた。柔かい、やさしい指だし、甘い匂いも若い女のものだった。

耕作は自分の醜い身体を少しも意に介しないようなてる子の態度に少なからず立ち迷った。若くて美しい娘なのだ。こういう女が、こんなになれなれしく身近によりそってくることは初めての経験だった。耕作はこれまで自分の身体をよく知っていたから、女に特別な気持を動かすことはなかった。が、てる子から手を握られ、まるで愛人のように林間を歩いていると、さすがに彼の胸も騒がずにはいられなかった。この冬の一日、てる子と逍遙した記憶はしだいに忘れがたいものとなった。

耕作は三十二になっていた。今までも嫁の話はあった。が、見合いとなると、必ず破談であった。格別資産家でもない、このような不具者のところへ誰もくる者はなかったのだ。嫁さえ来てくれたらと、ふじの心労はたいていではなかった。あらゆる人に世話を頼んだが、話はいずれもできなかった。若いころ、降るような縁談に困ったふじは、息子の嫁を迎えることができず、言いようのない辛さを味わっていた。

こういうときに、てる子のような女が現われたのは、ふじにとっても大きな希望だった。てる子は耕作の家にも、たびたび遊びにくるようになったのだ。広寿山に行って以来、彼とてる子とはそれほど打ちとけた間になっていた。

が、耕作の感情を、てる子が知っていたかどうかわからない。彼女の天性のコケットリイは白川病院に出入りするどの男性とも親しくしていた。彼女が耕作の家に遊びに行くようになったのも、いわば気まぐれで、深い子細があったのではなかった。

しかし、ふじも耕作も、てる子の来訪を一つの意味にとろうとしていた。彼の家に、てる子のような若い美人が遊びにくることはほとんど破天荒なことだった。ふじはてる子がくると、まるでお姫さまを迎えるように歓待した。

だが、ふじはさすがに、てる子に息子の嫁に来てくれ、と頼む勇氣はなかった。これまで、てる子と比較にならない器量の劣った女から、びしびし縁談を断わられてきたのだ。ふじはてる子に心の隅で万一を空頼みしながらも、半分は諦めていた。が、その諦めのなかにも、やはり何か奇跡のようなものを期待していた。

東禅寺は小さい寺だつた。塀の内側から木犀が道路に見えていた。ふじと耕作とが庫裏に回ると眼鏡をかけた小太りの僧が白い着物をきて出てきた。胡散げに耕作をじろじろ見た。

ふじが丁寧に、広寿山のほうで聞いたのだが、こちらで明治三十二年ごろ、鷗外先生などで禅の会があったそうですが、ご承知でしょうかと言うと、僧は無愛想に、

「何か、そんなことも聞いたようだが、わしの祖父さんの代だし、何もわかりません」と言った。その硬い表情からは、これ以上きいても、むだのように思われた。

「その時のことが、何か書きものにでもなって残っていませんか」

と念をいれたが、

「そんなものはありません」

と返事はやはりにべもなかった。

失望して寺の門を出た。四十年の年月が今さらのように思われた。時間の土砂が、痕跡をいたるところで埋めているのだった。

道路を歩いていると、後ろから声が追いかけてきた。振り返ると、先刻の白い着物の僧が手招きしている。

「今、思いだした。そのころの、寺に寄進したという魚板があるが、見ますか。名前が刻んであります」

と僧は言った。やはり根は親切な人のようだった。

魚板は古くて黒くなっていた。寄進者の名は捜してやっと判読できるほどである。が、その名前を見て耕作は息を詰めた。

寄進 玉水 俊虎
森 林太郎
二階堂行文
柴田 董之
安広伊三郎
上川 正一
戸上駒之助

思いがけない発見に、耕作はよろこび、手帳に書き写した。これは重要な手がかりだった。鷗外、俊虎以外の人の名は耕作も知らぬし、この寺僧も心当たりがなかった。が、何とかして、その身もとを捜し出せば、新しい資料を得る途が開けそうだった。耕作は小倉に古くからいる知人にほとんどききまわったが、誰もそれらの名前を知ってはいなかった。江南も心当たりがないと言った。耕作は白川のところへも行った。白川は種々な人が出入りするから、何かわかりそうだった。

「僕にもわからんな」

と、白川は、その名を見て言った。

「しかし、この安広伊三郎やすひろ いさぶろうというのは伴一郎ともいちろうの何かに当たる人かもしれんな。実六じつろくさんにでもきいてみたらどうだ」

安広伴一郎は満鉄総裁などやったことのある男だ。反対党から“アンパン”とアダ名された。この人の甥が安広実六おひで、独身で、酒好きの老画家だった。

耕作は実六の家を訪ねていった。路地裏の長屋の一軒で、出てきたのは同居人だったが、「安広さんなら東京に行きました。当分帰りませんよ」と教えた。

がっかりして家に帰ると、耕作に意外な人から手紙がきていた。それは鷗外の弟の森潤三郎じゆんさぶろうからだった。

文意は「貴下のことはK氏から承ったが、今度自分が兄のことを書くにあたって小倉時代のことを知りたい、貴下のご調査で差支えなくばご高教を仰ぎたい」

という非常に丁寧な文面だった。

耕作はよろこんで書き送った。

昭和十七年に出た森潤三郎著『鷗外森林太郎』の中には、<小倉市博労町の田上耕作氏は、在任中の兄の事蹟じせきを調べて居られるが、——>と耕作がベルトランに会った話などが載っている。

九

『鷗外全集』を見ると、鷗外が小倉時代に書いて地元紙に発表したのは次のとおりだ。

「我をして九州の富人たらしめば」

—明治三十二年 福岡日日新聞

「鷗外漁史とは誰ぞ」

—明治三十三年 福岡日日新聞

「小倉安国寺の記」

—明治三十四年 福岡日日新聞

「和氣清麻呂わけのきよまろと足立山と」、「再び和氣清麻呂と足立山と」

—明治三十五年 門司新報

耕作が考えたのは、鷗外のは原稿は当時新聞社の小倉支局が連絡に当たったかもしれないことだった。『門司新報』はずっと昔になくなっていて、『福岡日日新聞』の後身、『西日本新聞』社について聞くよりほかはない。

明治三十二三年ごろの小倉支局長の名前と、もしまだ存命であれば、その住所が知りたいと、新聞社の総務課あてに郵便で聞きあわせた。

この返事に期待することはほとんど不可能だった。五十年に近い昔の一地方支局長の名をいまだに新聞社は記録に残しているであろうか、しかも社は途中で組織が変わっているのだ。もしかりに幸運にも名がわかったとしても、おそらく生きてはいないだろう。むろん、現住所などもわかるまい。耕作の問い合わせは万一の僥倖ぎょうこうを恃んだにすぎなかった。

しかし、しばらくたって届いたその返事を見ると、奇跡というに近い感じだった。「調査の上、明治三十二年～三十六年の小倉支局長は麻生作男あそうさくお。現在、当県三潴郡柳河町の寺に居住の由なるも、寺名不詳」

寺名などわからなくてもよかった。これだけで充分だ。小さな町だから寺をたずねまわればわかるに違いない。

耕作は矢も楯もたまらない気持になった。

「それなら一緒に行っておたずねしようよ」

と、ふじが話を聞いて言ったのは耕作が望むなら、どこまでも、ついていってやりたかったのだ。

二人は汽車に乗った。もう、そのころは戦争がかなり進んでいた。汽車の窓から見る田舎の風景も、農家のほとんどの家が、“出征軍人”の旗をたてている。車中の乗客の会話も、戦争に関連していた。

小倉から汽車で三時間、久留米で降りて、さらに一時間ほど電車に乗ると柳河に着いた。有明海に面し十三万石のこの城下町は、近年水郷の町として名を知られてきた。道を歩いていても柳を岸辺に植えた川や堀がいたるところに見られたが、町はどことなく取り残された静かな荒廃が漂っていた。

柳河の某寺とのみで、寺の名は知れなかったが、行けば田舎のことだから二三の寺をまわるだけで何とかわかるものと勢いこんできたのだが、町の人にきくと、

「柳河には寺は二十四もあるばんも」

と聞かされて、ふじも耕作も途方にくれた。これだけの寺の数があるとは予想もしなかったのだ。

それでも、四つ五つの寺をたずねたが、心当たりはさらに得られなかった。

二人は道端の石の上に腰をおろして休んだ。そこにも堀が水を湛えていて、向かい岸の土蔵造りの壁の白さをうつしていた。空は晴れ渡り、ただ一きれの小さな白い雲が不安定にかかっていた。それは妙に怪しいかたちの雲だ。見るともなくそれを見ていると、耕作の心には、また耐えがたい空虚な感がひろがってくるのだった。こんなことを調べてまわって何になるか。いったい意味があるのだろうか。空疎な、たわいもないことを、自分だけがものものしく考えて、愚劣な努力を繰り返しているのではないか。――

ふじは横にならんでいる耕作の冴えない顔色を見ると、かわいそうになってきた。それで引きたてるように自分から立ちあがり、

「さあ、元気を出そうね、耕ちゃん」

と歩きだした。ふじのほうが一生懸命であった。

二十四の寺々を一つ一つ尋ねまわらねばならないかと思われたが、あんがいなところに手蔓をみつけた。道を歩いているうちに、ふと、“柳河町役場”の看板を見つけ、ここにきいてみる工夫を思いついたのである。

粗末な机に向かって書類を書いていた女事務員には、麻生作男の名前だけで、心当たりがあった。が、寺の名はやはり覚えぬと言い、傍らの年上の同僚に相談していた。それなら誰々さんに聞いたらわかるだろうとその女が言うと、若い女事務員はうなずいて、その誰々に電話をかけに席を立った。

電話はなかなか交換手が出ないらしかった。何度か指で電話機をかちゃかちゃいわせていたが一向に手応えなかった。

「このごろは局が混んでいるものですから、なかなか出ないのです」

と女事務員は言いわけのように言った。それは二十ばかりの娘だったが、全体の顔の輪郭から眼もとのあたりが、どこか山田てる子に似ているとふじは思った。

近ごろ、局が混んでいるというのも戦争の^{あわただ}慌しさが、この片田舎の城下町にも押しよせているのだった。やっとのことで電話が通じ、女事務員は相手と問答しながら紙に鉛筆を走らせた。

「麻生さんはここにおられるそうです」

と彼女はそのメモを渡し、道順を詳しく教えてくれた。

ふじは丁寧に礼を述べて表に出た。やっとなかかったという安心と女事務員の親切が心を明かるくした。山田てる子に似ていたということも^{ほほえ}微笑みたい気持だった。

ふじには、てる子が今の女事務員のように親切な女のように思えた。嫁になったら耕作のような不自由な^{からだ}身体をやさしくいたわってくれそうだった。そう考えると、てる子にどうしても来てもらいたかった。ふじは横にならんで歩いている耕作に話しかけた。

「ねえ、耕ちゃん。てる子さんはお嫁にきてくれるかねえ？」

耕作は何とも返事をしなかった。その顔は苦しそうだった。それは、不自由な肉体を引きずって、こうして不案内な土地を歩きまわっている苦痛からか、てる子の真意が^{つか}掴めずにいる苦しみからかわからなかったが、ふじは耕作のために小倉に帰ったら、思いきって必死に話をてる子に切り出そうと決心した。

天叟寺は^{てんそうじ}禅寺だった。藩祖の父に当たる我国武将の菩提寺である。案内を^こ請うと四十ぐらいの女が出てきて、わたしが麻生です、と言った。

「麻生作男さんとおっしゃるのは？」

「はい、父でございます」

元気だという返事である。まだ生きていたのだ。耕作もふじも、思わず叫びたいくらいうれしかった。さっそくに来意を言うと、

「さあ、もう老齢ですから、どうでしょう」

と首を傾けて笑った。

「おいくつでいらっしゃいますか？」

「八十一になります」

それから、一度奥へ引っこんだが、すぐ出てきて、

「どうぞ、お上がりください。父がお会いすると申しております」

と言った。

十

耕作は柳河から帰ると、麻生の話を整理した。

直接鷗外に接触していただいただけに麻生作男の話は期待以上のものがあった。八十一というが非常に元気だった。記憶の薄いところはあるが、呆けたようには見えなかった。

「鷗外先生にはたいへんお近づきを得ていましたな。役所から帰られると、よく私の家の表から、麻生君、麻生君と呼ばれて、一緒に散歩などに連れだされ、安国寺にもたびたびお供をしました。そんな時の先生はまことに^{らいらく}磊落でした。私が仕事で司令部に伺っても軍医部長室に^{しょう}請じられて、大声で^{ばか}馬鹿話をしては笑われたものです。ある時など隣の副官室で、閣下（当時少将）があんなにおもしろそうに話される相手は誰だろうというので、出てみると私なので、麻生はよほど閣下と親しいに違いないと言っていたほどです。鷗外といえば、むずかしい人のように思われるが、なかなかわれわれに対してはざっくばらんでたよ」

という話のはじまりだった。ここに二三時間ばかりいたが、鷗外の私宅まで自由に出入りした

という老人は、鷗外の日常生活をもっともよく知っていた。耕作の資料は、これでかなり豊富になった。

「しかし公私の別は非常にやかましかった。いったん軍服同士のつきあいとなると厳格でした。一度私が親戚しんせきのもので薬剤官をしている者が遊びにきたので心安だてに先生のところへ連れて行ったのです。その男はその時、大尉たいいか何かの軍服で行ったのですが、いやもう、大変な扱い、見ていてかわいそうなくらいでした。ところが二三日して、その男が今度は和服で行くと、前とは打って変わって丁重な扱い、玄関まで送ってくださるというしだいでした。小倉の町を着流しで散歩の時などは、知った者がお辞儀をすると、ていねいに笑顔で礼を返されたものですが、軍服を着て小倉駅に人を迎えに出ておられた時など、汽車の着くまでプラットホームいすに椅子を出させて腰をかけ、傲然とでもいいかげんに控えていて、答礼もロクにはしませんでした。先生はまた時間にやかましい人でなあ、会合などでも遅れてきた者は絶対に、どんな有力者でも室には入れなかった。婦人関係には最新なほど気を配り、自分が独身だものだから、女中も必ず二人は置いた。やむをえず一人しかいない時は、夜は近所に頼んで寝泊まりにやるという具合でした。三樹亭さんじゆという料亭があって、ここの娘が先生が気に入ってよく出かけていたが、決して一人だけを呼ぶということはない、いつもその妹娘と二人を呼んでいました。時の師団長の井上さんも独身でしたが、この方は本能の赴くままの行動で、先生といい対照でしたよ。何しろ勉強家で、夜は三四時間しか眠らないということでした。『即興詩人』の訳稿もそのころ続けておられました。各藩の古文書こもんじよも熱心に調べていました。私がおもとお近づきになったのも、柳河藩の古記録をお世話したことからです。それから小倉藩士族の藤田弘策という心理学者からも心理学を習っていました。この人の孫が小倉の魚町にいるはずです。先生が心理学に興味をもっておられたのは、同郷にしまねの西周の影響ではないかと思われまます」

麻生の話はこういうことからはいって行って、鷗外の生活を語って尽きるところがなかった。

耕作はかねて疑問に思っていた東禅寺の魚板ほに刻った名前を持ちだして見せた。

「ああ、これは—」

と老人はわけもなく言った。

「二階堂は門司新報の主筆です。柴田は開業医、安広は薬種屋、上川は小倉裁判所の判事、戸上は市立病院長です」

これを聞いて思いあたることがあった。「独身」に出てくる“病院長の戸田”、“裁判所の富山”はこの人たちがモデルであろう。

耕作は麻生の話を草稿にする一方、極力、東禅寺のメンバーの行方を捜した。これは身もとがわかってしまえば、困難な仕事ではなかった。柴田董之ただゆきの長女が市内の医者いしやくの妻になっていることがわかると、その人に会い、その口から他の人たちの所在もしだいに知ることができた。ことに戸上駒之助がただ一人、福岡になおも健在けんざいでいたことは彼を有頂天ゆうてんにした。

安広の老画家も東京から帰ってきたし、鷗外おうえの家に女中でいたという行橋在ゆくはしの身内みうちの人からも手紙が来た。これは耕作耕作のしていることが、新聞の記事になって出たからである。鷗外おうえが偕行社かいこうしゃでクラウゼイツの戦争論を講じていた時に、聞いていたという老軍人、始終宴会に使われていて鷗外おうえをよく知っているという旅館『梅屋』の主人であった故老、藤田弘策の息子など、小倉の鷗外おうえに関係をもつ人が次々に捜しだされた。

耕作がこうして躍起となったのは、山田てる子が縁談を断わってからなおさらであった。てる子はふじに、

「いやね、小母おぼさん、本気でそんなことを考えていたの」

と言って、声を出して笑った。彼女は後に入院患者と恋愛が生じて結婚した。このことから母子の愛情はいよいよお互いによりそい、二人だけの体温であたためあうというようになった。

耕作の資料はしだいに嵩^{かさ}を増していった。

が、戦争が進むにつれ、彼の仕事はだんだんと困難を加えてきた。誰もこんな穿鑿^{せんさく}など顧みるものはなくなった。敵機が自由に焼夷弾^{しょういだん}を頭上に落としている時、鷗外も漱石もあったものではない。人々は明日の命がわからないのだ。人をたずねて歩くなど思いもよらない。終戦まで耕作もまた巻脚絆^{まききやはん}をつけて、空襲下を逃げまどわねばならなかった。

十一

戦争が終わると、しかしさらにいっそう悲惨であった。もともと、その前から彼の病状は少しずつ昂進^{こうしん}していたが、食糧の欠乏がいっそう症状を悪化させた。老人と病人とでは買出しにも行けなかった。麻痺^{まひ}症状はひどくなり、歩行は困難となり、ほとんど起きていることさえできなくなった。

耕作はずっと寝たきりとなった。インフレが激しくなり、家賃以外にほとんどたよる生活費はなかったが、その家賃^{わづ}が僅かな値上げでは追いつかなかった。

家作が一軒ずつ失われていった。思えば白井正道も、このようにして母子の急場を助けようとは、予期しなかったであろう。ふじはヤミ米やヤミ魚を買って耕作にたべさせた。

「どう耕ちゃん、うまいかえ。これは長浜の生き魚だよ」

近くの漁村からとれる釣り魚である。耕作は、うなずきながら、腹這い^{はらば}になって、手掴みで飯と魚をたべた。もはや、箸^{はし}を握ることもできなくなったのである。

江南はよく耕作を訪れた。よく気のつく彼は、来るごとに卵や牛肉のようなものを、どこからか、手に入れて持ってきた。

「早くよくなって、あれを完成させろよ」

と江南が上から覗きこんで言うと、このごろはだいたいいいから、またぼつぼつはじめようとおもっている、というような意味を、いつもよりは、もっとわかりにくい言葉で言った。その顔は肉を削^そいだようにやせていた。

終戦後、数年の間に、家作の全部は売られ、自分の住居も人に半分は貸して、母子は裏の三疊^{ひっそく}の間に逼塞した。長い歳月と。絶えず玄界灘の潮風に曝されているこの家は、ほとんど軒も傾きかけていた。建具のたてつけは、どこもかしこも、がたがたであった。

耕作はやはり寝たままであった。病状は、停顿^{といとん}しているのか、よくもならず、悪くもならなかった。どうかすると、床の上に腹這って、自分の書いたものを出して見るがあった。それは風呂敷包みに一杯あった。足で歩いて蒐^{あつ}めた彼の『小倉日記』だ。彼は江南にたのんで整理してもらおうかと思った。が、まだまだ身体は癒^{なお}るという確信があった。癒った時の空想をいろいろ愉しむふうだった。

昭和二十五年の暮になって、急に彼の衰弱はひどくなった。ふじは日夜寝もせずに看病した。

ある晩、ちょうど、江南が来合わせている時だった。今までうとうとと眠ったようにしていた耕作が、枕^{まくら}から頭をふともたげた。そして何か聞き耳をたてるような格好をした。

「どうしたの？」

とふじが聞くと、口の中で返事をしたようだった。もうこのごろは日ごろのわかりにくい言葉がさらにひどくなって、啞^おに近くなっていた。が、この時、なおもふじが、

「どうしたの？」

ときいて、顔を近づけると、不思議とはっきりと物を言った。

鈴の音が聞こえる、というのだ。

「鈴？」

ときき返すと、こっくりとうなずいた。そのまま顔を枕にうずめるようにして、なおもじっと聞いている様子をした。死期に臨んだ人間の混濁した脳は何の幻聴を聞かせたのであろうか。冬の夜の戸外は足音もなかった。

その夜あけごろから昏睡状態となり、十時間後に息をひきとった。雪が降ったり、陽がさしたり、鷗外が“冬の夕立”と評した空模様の日であった。

ふじが、熊本の遠い親戚の家に引き取られたのは、耕作の寂しい初七日が過ぎてで、遺骨と風呂敷包みの草稿とが、彼女の大切な荷物だった。

昭和二十六年二月、東京で鷗外の「小倉日記」が発見されたのは周知のとおりである。鷗外の子息が、疎開先から持ち帰った反古ばかりはといった筆筈を整理していると、この日記が出てきたのだ。田上耕作が、この事実を知らずに死んだのは、不幸か幸福かわからない。

(新潮文庫版による)

指導上の留意点

- 1 作品のテーマは、人間にとって「努力」することは重要であるが、努力は必ずしも報われるとは限らないということである。このテーマを主人公耕作が鷗外の日記を探し求める姿を通じて、丁寧に読むことが大切である。
- 2 トリミングは、できる限り耕作の足跡を辿ることを主眼に置いたが、その重要度において紙数の関係からカットした箇所がある。(上記、実線で囲んだ箇所)
- 3 初読の直後に感想を書かせる。
- 4 耕作が出会った人物を図式化して、理解の助けとする。
- 5 耕作の行動をひとまとまりの段落とし、見出しを付けさせて、行動を追う。
- 6 耕作の出会った人物の造型について、丁寧に取り上げる。
- 7 耕作の母の耕作に対する態度について、理解を深める。
- 8 耕作の心情の変化について、丁寧に取り上げ、理解を深める。
- 9 てる子の登場について、その意義を話し合う。
- 10 授業の最後に感想を書かせる。

作文コンクール課題・作品名 (以下の中から一点を選ぶというもの)

- ・平成14年度 『或る「小倉日記」伝』、『点と線』、『砂の器』
- ・平成15年度 『ゼロの焦点』、『石の骨』、『西郷札』
- ・平成16年度 『砂の器』、『恋情』、『遭難』
- ・平成17年度 『球形の荒野』、『地方紙を買う女』、『点と線』
- ・平成18年度 『眼の壁』、『西郷札』、『陸行水行』
- ・平成19年度 『時間の習俗』、『共犯者』、『啾々吟』
- ・平成20年度 『或る「小倉日記」伝』、『点と線』、『左の腕』
- ・平成21年度 『顔』、『西郷札』、『球形の荒野』

- ・平成22年度 『特技』、『点と線』、『遭難』
- ・平成23年度 『球形の荒野』、『断碑』、『腹中の敵』
- ・平成24年度 『砂の器』、『或る「小倉日記」伝』、『高校殺人事件』

参考文献

- ・「文藝春秋」昭和28年 3月 文藝春秋
- ・「群像」昭和36年 2月 講談社
- ・「国文学 解釈と鑑賞 松本清張」昭和53年 6月 至文堂
- ・「國文學 解釈と教材の研究 松本清張」昭和58年 9月 学燈社
- ・『松本清張記念館図録』平成10年 8月 松本清張記念館
- ・『松本清張事典』決定版 郷原 宏著 平成17年 4月 角川学芸出版
- ・『別冊太陽 松本清張』平成18年 6月 平凡社
- ・『松本清張事典』増補版 志村有弘他編 平成20年 4月 勉誠出版
- ・「松本清張全集」全66巻（月報付） 文藝春秋
- ・「松本清張短編全集」全11巻・カッパノベルス 光文社
- ・「松本清張小説セレクション」全36巻 阿刀田高編 中央公論新社